

イグルーをつくってみよう

子どもは学校のグラウンドで様々な雪遊びをします。かまくらや雪像づくり、雪の中にボタンと倒れて人型をつくる遊び、すべり台……。これまでの家族との経験もあるでしょうし、学校で教わる雪遊びもあります。ここでは、雪遊びの一つとしてイグルーを紹介します。

イグルーは、カナダ北部の地域で使用される、狩猟の旅先で圧雪ブロックを使って作る一時的なシェルターのことです。日本のかまくらとの違いは、イグルーが雪や氷をブロック状に固めたものを積み重ねて作るということです。



ここがポイント

イグルーづくりのポイント

イグルーは、ブロック状に固めた雪や氷を積み重ねてつくります。つくる際のポイントは次の通りです。

①型となる容器は、できるだけ軽く、重過ぎないものを使う

→雪を詰め込む容器が大き過ぎると、できたブロックを積む作業をする時に持ち上げるのがつらくなります。子どもと一緒に作業するのですから重過るとイヤになってしまいます。容器は、プラスチック製コンテナで児童机くらいの広さがあるもの（40 cm×30 cm×30 cm）が適しています。空気穴が開いていると、容器からブロックを抜き取りやすいです。

②ブロック状に固めた雪が崩れないようにする

→型いっぱいに入れた後、靴底で雪を踏み固めます。

ここがポイント

イグルーのつくり方

雪を持ち運ぶ作業が多いため、濡れに備えて手袋（替え手袋もあるとよい）が必要です。あとは、スコップやショベル、雪や成型したブロックを運ぶためのソリがあるとよいでしょう。あとは、ブロックにする型（容器）です。

イグルー作りに適しているのは、グラウンドで雪を集める場所から離れ過ぎず、かつ地面が圧雪されて固まっている場所です。そこに、目安となる円をショベルで描いておきます。この時に5～6人の子どもたちが座ると検討をつけることができます。傾きがないよう、しっかり踏み固めましょう。

それでは、イグルーのつくり方を紹介します。

- ①やわらかい雪を容器に入れる。入れたら必ず踏み固めていく。一段目となるブロックは、やがて重みでつぶれていくので深さがある方がよい
 - ②固まったら、容器を逆さにしてブロックを抜き取る
 - ③描いた円を目安にブロックを次々と置く。入り口を用意することを忘れずに。
 - ④一段目を置いたら二段目を置く。一段目に置いたブロック二つの真ん中に一つ積む。この時、ドーム型にするために少し円の内側にずらしながら積む
 - ⑤三段目以降は、①～④を繰り返す。また、土台のブロックより少し薄いブロックを作ると積みやすい。だんだん子どもが積みなくなる高さになるので、教師が補助する。ブロックをうまくずらすことで、窓を作ることもできる
 - ⑥天井の穴があと少しでうまるという時は更に薄いブロックを作り、載せる
 - ⑦ブロックの隙間は雪や氷の塊でうめる
- 天井ができるとイグルーの完成です。努力が実を結び、目を輝かせる瞬間です。

Active

完成したイグルーに入って、楽しく遊ぶことができます。自分たちで作ったという自信が生まれ、一緒に入りたい友達を招き入れて遊びの輪を広げるなど、屋外での雪遊びをアクティブに楽しめます。

あるある NG!

他の学級や学年の子に勝手に使われ、破損したらショックです。校内で必ず情報を共有し、指導をしていただきます。

また、崩落してケガをすることがないように教師が安全管理をします。子どもと一緒に外へ出て、イグルーの様子を見ましょう。

気付き！

雪遊びをしながら、子どもは雪質と温度の関係に気付くようになります。「今日の雪は固まりやすいよ。」や「温かいから氷が融けてきた。」などの言葉が出たらチャンスです。「固まりにくい雪の日があるの?」といった教師の関わりで、「気温が低い＝さらさらした雪」、「気温が高い＝雪玉などを作るのに適した雪」といった気付きへと導きます。

イグルーの中に入ると、外気より温かいという感覚が生まれます。そこで教師は、北国の子の寒さを防ぐ知恵としてイグルーがあることに気付かせます。また、イグルーは暖気によって形が崩れ始めます。「イグルーが融けてきた!」という事実から、気温との関連に子どもが目を向けるようになります。